

日本文化の中で高学歴移住女性のキャリア観はどのように変化するのか
ー複線径路等至性アプローチ (TEA) を用いて分析した
ベトナム人女性のインタビューを通してー

お茶の水女子大学 加藤直子・Nguyen Van Anh

我が国は、出産・育児期の女性が働きにくい国である。女性就労は、M字型就労となり、高学歴女性の離職率が高く、高学歴・高収入の層における女性の専業主婦志向が見られるという特徴がある。

このような日本社会に移住した高学歴外国人女性のキャリア形成に関する研究は進んでいるが、研究対象となるのは主に中国出身の女性である。この10年間で急激に増加したベトナム人移住女性のキャリア形成に関する研究は十分とは言えない。

ベトナムは共働きを当たり前とする社会であり、高学歴女性において特にその傾向が強い。今後、日本への移住増加が見込まれる高学歴ベトナム人女性を対象としたキャリア形成の実態を把握する必要があると考え、以下の研究課題を設定した。

RQ1：日本に結婚移住した高学歴ベトナム人女性のキャリア観はどのように変化するか。

RQ2：キャリア観を変化させる文化的促進・阻害要因はどのようなものか。

調査対象者は、日本に移住した高学歴ベトナム人女性1名である。家族構成は、ベトナム人男性の夫との2人の子供である。高学歴ベトナム人移住女性のキャリア観の変化を明らかにするため、3回の半構造化インタビューを実施し、複線径路等至性アプローチを用いて分析した。1回目のインタビューでは、キャリア観の変化についての語りを聞き、TEM (Trajectory Equifinality Modeling; TEM) 図を作成した。2回目と3回目のインタビューでは、TEM図を見ながら調査対象者と発表者で径路について確認・修正を行った。各インタビューは、1~1.5時間程度であり、インタビュー内容はすべてICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。

分析の結果、共働きが当たり前の国で育った高学歴ベトナム人女性は、日本への移住後、夫の長時間労働・女性へ偏る家事育児負担・子供の成長の喜び等を経験し、やむを得ず主婦化を受け入れることが明らかになった。また、祖父母が孫の世話をするベトナムでは、女性の定年は55歳と早く、定年後の女性には孫の世話をするという義務感が生じやすい。しかし、日本への移住したことで、55歳以降の働く自分をイメージするようになり、孫の世話の義務感が薄らぎ、「自分のための第二の人生」で専門性を生かした起業を目指す姿を描いた。

本研究は、日本文化の中で高学歴移住ベトナム人女性が出産・育児を機にやむを得ず主婦化を受け入れるが、育児が一段落した時、「第二の人生」での起業という新たな目標を見つける径路を描いた点に意義がある。

【参考文献】

安田裕子・サトウタツヤ (2017) 『TEMでひろがる社会学実装 ライフの充実を支援する』
誠信書房